

ベテラン保育士が捉える子どもの育ちの変化 (1)

—— 3歳以上児の場合 ——

曾根 章友・村上 智子

1. 研究の背景

近年では、どの保育・教育場面においても“気になる子”が増えたなど、これまであまり見られなかった子どもの姿が取り上げられ、問題視されることが多くなったように思う。一概にそのことを「子どもの変化」とは言えないが、実際問題これまでに目の当たりにしたことのない姿に戸惑いを覚える人は少なくないだろう。また、先般の「保育所保育指針」並びに「幼稚園教育要領」の改訂の起程には、「子どもの育ちの変化」や「家庭環境の変化」への懸念があり、平成17年1月に中央教育審議会が出した「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について（答申）」¹⁾では、「従来に比べて子どもの育ちが何かおかしいのではないか」と明確に子どもの育ちへの懸念を記している。

このような背景の下で改訂に至ったわけであるが、さらに答申の中ではこの子どもの育ちの問題について、「幼児教育を担う家庭・地域社会・幼稚園等施設は、その責任と役割を十分に果たしてきたかどうか、それぞれが当事者意識を持って考えることが必要」で、「幼児教育の原点に立ち返って、子どもの育ちの現状と背景を検証し、幼児の健やかな成長を保障するために必要となる対応策を講ずることが、今日の幼児教育に与えられた課題である。」としている。

そこで本研究は、日々子どもと接している保育者が子どもの育ちの変化について、どの

ように感じ、捉えているのかを明らかにしようと思い研究を試みた。その際、調査項目を定め、測定値を基にして論じることができたが、今回はあえてそのような方法はとらずに、今、保育者が感じている子どもの育ちの変化を直接寄せていただき、それを基に論じたいと思い、自由記述が大半を占めるアンケート調査をもって考察した。

なお、本研究は山形県内の保育所並びに幼稚園を対象に行ったが、本稿は保育所のみを研究発表の対象とした。また、この研究は「子どもの育ちの変化」を基軸に捉えているため、ある程度保育年数のある者を対象とし、アンケート調査を実施することで明らかにしようと考えた。そこで、その基準を保育年数20年以上と捉え、これをベテラン保育士とした。

2. 調査の方法

アンケート調査は、平成19年12月に山形県内の保育所245ヵ所に質問紙を送付し回収する形で実施した。質問紙（資料1）は3歳未満児と以上児で分け、それぞれに集計し、考察を試みた。本稿は3歳以上児を対象としたもので、有効回答率44.9%を得た。

3. 集計結果と考察

1) 回答者の基本属性

回答者110名は全て女性で、平均年齢は53.4歳だった。また、回答者の役職は園長が12名（全体の10.9%）、副園長7名（6.4%）、主任53名（48.2%）、主査5名（4.5%）、保育士24名（21.8%）、その他3名（2.7%）、無回答6名（5.5%）だった。

調査対象としたベテラン保育士の保育歴の平均は30.7年だった。

2) 子どもの変化時期について

子どもの育ちが変化してきたと思われる時期については、ここ15年ぐらいの間と捉えている保育士が全体の74.5%（①～③の合算）を占めていた（表1）。ただ、この「子どもの育ちの変化」に対して、⑤の選択者や無回答者の中に、「子どもの本質は変わらない。

取り巻く環境の変化が大きい」という声が多く聞かれた。確かに、本質的に見れば子ども自体に変化はないのだろう。しかし例えば、今の子どもは昔の子どもに比べて身体発育がよいのに対して、身体機能の面では劣っていることなどは、育ちの環境が影響していると考えられている。このように、人間が成長・発達する上では育つ環境からの影響は少なからずあるのではないか。そう考えれば、戦後以降、特にここ数十年は目まぐるしく社会状況は変化し、それに伴って家庭環境も移り変わってきた。その影響は子どもの人間形成に大きく関係し、「育ちの変化」はあるものと捉えるのが自然ではないだろうか。

表1. 子どもの変化時期

選 択 肢	回答数	%
①5年前から	14	12.7
②10年前から	38	34.5
③15年前から	30	27.3
④20年前から	8	7.3
⑤変化しているとは思わない	4	3.6
*無回答	16	14.5

3) 具体的な子どもの様子

では実際に、子どもは変化とも言うべき姿をどのように現しているのか、基本的な生活習慣の獲得、身体の発育、運動機能の発達、知的発達、情緒面、社会性、遊びの7項目について自由記述で回答を頂いた。その中から、回答の多かった内容を中心に最近の傾向を推察する。

【基本的な生活習慣】

基本的な生活習慣の獲得については集計結果を睡眠、食事、排泄、更衣、健康、その他のものと6つに分類した。特に目立ったものとしては「オムツをして登園してくる子が多い」が49回答、「箸が正しく使えない」が38回答、「生活リズムが乱れている（夜型化）」が34回答と多かった（表2）。

排泄については、未満児からの入園児については園側が適齢期になるとトイレトレーニングを促していくので自立がなされていくが、3歳からの入園児については、家庭

においてトイレトレーニングの意識や理解が低いようで、オムツをして登園して来るという子どもが多い傾向にある。そのため、49回答のうち3歳児が該当すると回答した方が33名いた。園では入園後からトイレトレーニングを開始し、排泄の自立を促しているが、各家庭からの協力がなかなか得られず、園任せとなっていて、以前よりも思うように自立が図られ難くなっているという回答が多数あった。また昔と違う点は、紙オムツが主流になったことで親のトイレトレーニングの意識が変わり、紙オムツを外す時期が1年遅くなったという回答が聞かれた。その他、時代を反映した回答としては、ウォシュレットの影響か、おしりを拭けない子が多かったり、和式トイレでの排泄ができない子どももいるようだ。

次に食事については「箸が正しく使えない」という回答が多くあった。その他にも「朝食を食べないで登園してくる子」や「食事のマナーが悪い／食の自立が未熟」「偏食（好き嫌が多い）」などが挙げられていた。この要因として、親自身が正しい箸の持ち方ができなかつたり、偏食であったりすることが子どもにも影響していると、家庭での親の食生活の乱れを指摘する声が多くあった。

このような親の生活習慣の乱れは睡眠にも見られ、遅寝遅起きの子が多く、次の日の園生活に支障をきたしていることが挙げられていた。睡眠は子どもの心身の発達に重要な意味を持ち、親が自分の生活に子どもをあわせていることについての懸念が心配されていた。

更衣に関することでは、衣服の着脱が自分でできなかつたり、あるいはしようとしなことが挙げられていたが、「清潔な衣類を身に付けて来るようになり、おしゃれになった」という声も聞かれた。

健康面については、虫歯に関する回答が多数あり、「虫歯に気を付けているため虫歯が少ない」と逆に「虫歯が多い」という、相反する回答が寄せられた。これも家庭での親の養育観や知識力の違いによるものと思われる。

その他の項目では、身の回りのことが自分でできなかつたり、大人に依存的で自分からしようとしなといった回答が見られた。現代の子どもは全体的に幼くなっており、保育士の援助が必要な子が多くなってきていると指摘する回答も寄せられた。

表 2. 基本的な生活習慣

(回答数)

●睡眠に関すること	総 数	3 歳児	4 歳児	5 歳児
・生活リズムが乱れている (夜型化)	34	2		1

●食事に関すること	総 数	3 歳児	4 歳児	5 歳児
・箸が正しく使えない	38	9	3	4
・朝食を食べないで登園してくる子	20	1	1	
・食事のマナーが悪い／食の自立が未熟	18	4	1	
・偏食 (好き嫌いが多い)	17	4	1	
・咀嚼力や嚙む力が弱い	8	1	1	
・食事中の姿勢が悪い	5	3	1	
・スプーンが使えない	4	1	1	

●排泄に関すること	総 数	3 歳児	4 歳児	5 歳児
・オムツをして登園してくる子が多い	49	33	4	
・排泄の自立ができない	5	1		1
・夜、オムツをして寝る子がいる	3			2
・おしりを拭けない子が多い (ウォシュレットの影響?)	3		2	

●更衣に関すること	総 数	3 歳児	4 歳児	5 歳児
・衣服の着脱、調節が自分でできない・しようとならない	10	3	1	

●健康に関すること	総 数	3 歳児	4 歳児	5 歳児
・虫歯が少ない (虫歯に気をつけている)	13			1
・虫歯が多い	10			1
・鼻を上手くかめない子が多い	3	2		1
・清潔に関して関心が高い	3			

●その他	総 数	3 歳児	4 歳児	5 歳児
・身の回りのことができない・しようとならない	9	2	1	
・依存的	8	1	1	1
・挨拶ができない	5			
・自分の持ち物を認識できない	3			1
・話をじっとして聞いてもらえない (落ち着きがない)	3			

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・乳児から入所している子は自立が早く、家庭保育から入園した子は未自立な面が多い。
- ・依存的な子と、自分から積極的にできる子の差が大きくなった。
- ・朝ごはんを食べてこない。登園してきて早い子は園で家から持ってきたパン等を食べる。
- ・生活形態が洋風化してきたこともあり、日本文化として当たり前のことができなくなってきた。
- ・母親に「先生！起きたら顔洗うんですか？どうして？」と聞かれたことがある。
- ・登園してくる車の中でコンビニからおにぎりを買って食べさせてきたり、お菓子、ガム等を食べさせたりすることが目立つ。

【身体の発育】

身体の発育面については体格と体質の2つに分類して集計した。体格では「発育の良い子（16回答）」が増えており、中には太り気味の、いわゆる「肥満傾向にある子（16回答）」も多くなってきているようだ（表3）。しかし、その一方で発育の遅い子もおり「成長の差（13回答）」が大きく見られるといった回答も多かった。

体質の面では、「アレルギー体質の子（16回答）」が増えてきているといった指摘が多く、喘息・アトピー性皮膚炎・花粉症や、麦・そば・たまご・牛乳などの食物アレルギーをもつ子の増加が挙げられていた。また、「視力の低下（7回答）」や「病気への抵抗力や免疫力の弱い子（4回答）」も見られるようだ。

身体の発育については、以前よりも食事の栄養バランスの面で良くなってきていることが挙げられているが、中にはそれが過剰な栄養のとりすぎにもなっており、不規則な生活習慣や運動不足と相俟ってアンバランスな成長となっている傾向が強い。外見とともに、内面的な身体機能もバランスよく成長しなければ、望ましい身体の発育とは言えないのではないか。

表3. 身体の発育

(回答数)

●体格に関すること	総数	3歳児	4歳児	5歳児
・体格(身長・体重)の良い子が多い	16	1		2
・太り気味(肥満)の子が多い	16		2	1
・発育の差が大きい	13			1
・細身の子(特に女の子)が目立つ	4		1	1
・発育が早い	2			1

●体質に関すること	総数	3歳児	4歳児	5歳児
・喘息/アトピー/乾燥肌/アレルギー体質の子が多い	16			
・視力が悪く、眼鏡使用の子が増えてきている	7			1
・病気への抵抗力・免疫力が弱い	4			

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・年齢とともに視力の低下している子が多い。
- ・身長は伸びているが、伴った力が育っていない。
- ・年長の女兒の身体面での成長が年々早くなっていると思う。

【運動機能】

運動機能については、それを構成する要素として挙げられる筋力、敏捷性、持久性、平衡性、柔軟性、協応性の6項目とその他のものとで分類した。

その結果、「運動能力の低さ(27回答)」や「体力不足(28回答)」、歩行バランスが悪く「転びやすい(21回答)」「転び方がわからない(14回答)」ため危険回避ができない、「足腰が弱い(10回答)」、「姿勢が悪い(10回答)」などの項目が多数挙げられた(表4)。これらの原因としては、車社会で歩くことが少なくなったこと、遊びが室内傾向にあり、例えば、自ら進んで鉄棒や雲梯で遊ぶ子が少なくなっていることが挙げられていた。また、園側も安全性を考慮して、身体を動かす活動の機会を減らしているのではないかといった指摘も聞かれた。確かに、ここ最近の保育所の様子を見ると、怪我や事故の発生において保護者からの過剰な責めを恐れて、静的遊びの傾向にあるように思われる。

運動機能はじっとして促進されるものではなく発達段階に応じた適度な運動が不可

欠である。身体の成長とともに運動機能の発達も並行して育んでいくことを、今後は考慮して行かなければならないのではないか。

表4. 運動機能

(回答数)

●筋力	総数	3歳児	4歳児	5歳児
足腰が弱い	10			
姿勢が悪い	10	1	1	

●敏捷性	総数	3歳児	4歳児	5歳児
敏捷性がない	6			

●持久性	総数	3歳児	4歳児	5歳児
持久力（心身ともに）がない	28	2	1	1
長い距離が歩けない	5			1

●平衡性	総数	3歳児	4歳児	5歳児
転びやすい（歩行のバランスが悪い）	21	4	1	
ケガをしやすい	7	2		
バランス感覚が悪い	7			

●柔軟性	総数	3歳児	4歳児	5歳児
体が硬い（柔軟性に欠ける）	4			

●協応性	総数	3歳児	4歳児	5歳児
スキップができない	4		2	1

●その他	総数	3歳児	4歳児	5歳児
運動能力が低い	27	1	1	7
転び方がわからない（危険回避ができない）	14			
手先が不器用	13	3	1	2
体のバランスが悪い（まっすぐに立てない）	9			
運動面の経験不足	8		1	
発達の個人差が大きい	7		1	1
体を使う遊びを苦手とする子が多い	5	1	1	

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・跳ぶ・走る・投げることは昔より劣る。
- ・年長になるとほぼ全員ができていた前転（でんぐり返し）ができない。
- ・まっすぐに走ることができない（5歳児）。
- ・兄弟のいる子は色々な面で発育がよく感じられる。特に縄跳びに差がある。
- ・走ったり、散歩に行き歩いてあと、筋肉痛になる子が増えている（4・5歳児）。
- ・散歩に行き遊んできたりする時、昔の子は帰るときの体力を残していました（家で出かけても駅・バス停から家まで歩いてきたから）。でも、今は車で遊びに行きめいっぱい遊びまた乗って帰れるので、散歩に行きても目的地で力を全部使ってしまう、歩いて帰ることを考えていない。経験がないので、力の配分がうまくできません。遠足では親も「疲れた」と言います。

【知的発達】

知的発達については、言葉や数、文字に関することが多数挙げられ、これと残りの項目を「その他」のものとして分けて集計した。

言葉や数、文字は全体的に発達が早くなってきていて、「すらすら文字を読む（34回答）」ことができたり、「文字が書ける（17回答）」子が増えてきていて、中には3歳児でもすらすらと文字の読み書きができる子も少なくないようだ（表5）。その他の年齢でも「漢字の読み書き（6回答）」ができたり、「英単語を知っている（8回答）」「計算ができる（4回答）」子も多いようだ。この要因としてある回答者は、子どもが親から「年齢相応以上の知識を植え付けられている」という現状を指摘し、また別の回答者は「目に見えやすい知的発達への喜びを感じる保護者が多く、早くから学習教材やビデオをやっているため」と回答していた。

その他の面では、「知的発達の差が大きい（9回答）」ことを指摘する回答が多く、記憶力、音感やリズム感が昔の子と比べて良かったり、パソコンや携帯電話、ゲームなどを簡単に操作するなど現代っ子の一面をのぞかせる子も多いようだ。しかし、その反面、理解力や想像力、創造力が乏しかったり、人の話をじっと聞けない、集中力に欠ける、現実のことを吸収することが弱いなど知的発達の遅れが見られ、場合によっては学習障害につな

がると思われる子も増えてきているという回答も寄せられた。

また、いろいろなことをよく知っている子も増えているようだが、テレビやビデオなどの視覚から入る知識が多く、お話しや絵本からの獲得があまり見られなかったり、知識だけで頭でっかちの子が多く、自分で考えたり、応用することが苦手な子もいるようだ。

高学歴社会や格差社会と言われる現代において、知的発達を優先する保護者が多いことは、その他の人間として大事なものを育む余地を狭め、社会に適応し難い偏った人間を育てているような気がする。現に、自分の身の回りのことができないのに、知的な面だけが発達している子が見られ、生活力につながる知識は下がっていると、知的面のバランスの悪さを指摘する回答もあった。

表5. 知的発達

(回答数)

●言葉・数・文字に関すること	総数	3歳児	4歳児	5歳児
すらすら字(ひらがな)を読む子がいる	34	19	5	1
文字が書ける	17	6	3	1
文字、数字に興味を示す子が多い	11	5	1	2
英単語を知っている	8	1	1	1
漢字の読み書きができる	6		1	2
絵本を一人で読める	5	1	2	
計算ができる	4		1	2
言葉の表現力が豊富である	4		1	1
数を数えることができる	3			
時計を正確に読む	3	1	1	2
名前が書ける	2	1		1
数字を読める	2	1		1
数を数えることができない	2	1		1

●その他	総数	3歳児	4歳児	5歳児
知的発達の違いが大きい	9			1
視覚から入る知識が多い	9		1	2
習い事に行く子供が多い	8	2	1	
頭でっかちの子が多くなってきている	6			
自分で考えたり、応用することが苦手	4			1
大人びた会話をする	3			1
記憶力が良い	3		1	
理解力が乏しい	3	1		2
音感、リズム感が良い子供が多くなった	2			
人の話をじっと聞けない	2			
知的発達が遅れている	2	1		1
学習障害につながると思われる子供が増えてきている	2			

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・テレビやビデオなどのことはすぐに吸収するが、現実のことに対する吸収が弱い子供がいる。
- ・5才児でも九九や四字熟語などを知っている子供がいる（親の教育）。5才児でも自分の名前の文字が読めず、書けない子供がいる。
- ・テレビなどの影響か、難しい言葉や他人を中傷する言葉を平気で話す（5歳児）。
- ・日本語での会話もままならない時期に、英会話教室に通う子供がいる（3歳児）。

【情緒面】

情緒面はあまり好ましいと思われる回答が無く、問題視する回答がほとんどを占めた。

その中でも回答が多かったのは、「自分の思い通りにならないとすぐにキレたり、乱暴になったり、すねたり、かんしゃくを起こす（38回答）」「自己中心的で協調性がなく、集団行動ができない（20回答）」「諦めがはやく、我慢する気持ちが弱い（14回答）」「自分の感情をうまく表出できず、困ったことがあるとすぐに泣いたりする（14回答）」「落ち着きがない（12回答）」「甘えたい子供が増えた（10回答）」「暴力的（10回答）」などである（表6）。

現代の子は、物・量的な面では何でも恵まれているが、家庭での親との触れ合いが少なく、心がさみしい子が多いような気がする。そのため保育士がいくら愛情をそそいで可愛がっても満足しない子が多く、満たされない感情を望ましくない言動で表出してしまう子が多いことは、社会にとって豊かさとは何かを考えさせる一つの課題でもある。

表6. 情緒面

(回答数)

	総数	3歳児	4歳児	5歳児
自分の思い通りにならないとすぐにキレたり、乱暴になったり、すねたり、かんしゃくを起こす	38	3	6	7
自己中心的で協調性がなく、集団行動ができない	20	1	4	3
諦めがはやく、我慢する気持ちが弱い	14		1	
自分の感情をうまく表出できず、困ったことがあるとすぐに泣いたりする	14	1	1	1
落ち着きがない	12		1	1
甘えたい子が増えた	10	1	1	
暴力的	10	1	2	2
精神的に弱く、ちょっとしたことで不安定になったり、頭痛や腹痛を訴える子が多くなってきた	8			
相手を一方的に責めるなど思いやりのない	8			
立ち直りが遅く、気持ちの切り替えができない	7	1	1	4
集中力がない	5	1		
素直さがない	3			
喜怒哀楽が豊かである	3		1	2
欲求不満	3			
感情の起伏が激しい(イライラ)	3	1		

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・感情の起伏が激しく、喜んで遊んでいると思ったら、急に隅っこでいじけたり、ストライキを起こす。理由がわからないことが多い。
- ・共働き家庭や親気質のうすさなどから、内に秘めた不安定がみられてきていると思う。親に訴えられず、園に来てから体調不良を訴えたり、親が困ることをわざとしてみたりなど、昔に比べてとても子どもなりに知恵を働かせた行動が見られる。

- ・月曜日や休み明け、ものすごく不満をためてくる子が多い。
- ・発達障害児とまではいなくても、一对一の関わりを必要とする子が年々増加傾向にある。

【社会性】

社会性も情緒面と同じように、あまり望ましい回答は聞かれなかった。

「自己中心的 (25回答)」「玩具や物に対する独占欲が強い (22回答)」「人とのかわりや友達との接し方が苦手で、決まった友達としか遊べない (18回答)」などに回答が集中したが、その他にも「思いやりの気持ちが育っていない (9回答)」「突発的な行動や乱暴な行動にすぐなる (8回答)」「人の話を聞くことができない (7回答)」「ルールや順番を守れない (7回答)」「集団遊びを嫌がる (6回答)」などの回答も多くあった (表7)。

社会性に問題が見られることは、集団で生活している園生活にも大きく影響し、さまざまな活動場面でトラブルが起これば、その度に活動を中断せざるをえなく、計画通りには進めない困難な状況をつくってしまう。また、それが他の子どもにも影響することも問題で、いかに対応するかといった保育士の力量が問われることになる。

育ちの環境が重視される中で、現代社会の変容は、人が育つ環境の悪化を招いたことは否定できない。家庭における核家族化や社会における人間関係の希薄化、人と関わる交流機会の減少は大人社会だけの問題ではなく、子どもの育ちにも大きく関わる。この社会性の問題もそこに起因することが大きいように思う。先般の幼稚園や小学校の教育要領の改訂では、「協同的な学び」が強調されたが、その協同の前提となる社会性をどう育むかを、まず第一に考えなければ、絵に描いた餅で終わることになってしまう。

表7. 社会性

(回答数)

	総数	3歳児	4歳児	5歳児
自己中心的	25	2	1	3
玩具や物に対する独占欲が強い 物を共有できない	22	5	7	4
人とかかわり、友達との接し方が苦手、 決まった友達としか遊べない	18	1	1	3
思いやりの気持ちが育っていない	9			
突発的な／乱暴な行動にすぐなる	8			1
人の話を聞くことができない	7	1		1
ルール／順番を守れない	7			
集団遊び（行動）を嫌がる	6			
自己主張が強い	5			
自分から遊びの輪の中に入っていけない	5		1	1
年下の子をかかわがる	5		1	2
挨拶や返事ができない	5		1	2
言葉がきつい／乱暴な言葉を使う	5			
マイペースの子が多い	3			
善悪の判断がつかない	3			1
協調性が乏しい	3		1	2
主体性がない	2			1
異年齢児との関わりができない	2			
異年齢児との関わりが積極的にできる	2	1		
手伝うことを嫌がらずにできる	2		2	1
片づけができない	2		1	
泣いている子がいても、気にかけない	2			

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・“死ぬ”“リセット”などの会話が平気で使われるようになった。
- ・友達関係がうまくできない子が多くなった。他の子の嫌がること、危ないことを年長児になっても止められない、しょっちゅうトラブルを起こし、くり返し注意をしたり、1対1で関わりを持ったりしても落ち着かない状態が続く子が数人いる。
- ・自己中心的で友達とのトラブルが多い。

- ・玩具の貸し借りがうまくできない子がいる。

【遊び】

遊びも昔とは大分様変わりをし、私たちが体験できなかったような遊びで子どもたちは楽しんでいるようだ。しかしそれは、私たちが体験してきた遊びのおもしろさの性質とは、かけ離れているような印象を受ける回答が多かった(表8)。「遊びの豊かさ」という表現が適切かは分からないが、私たちが遊びの中で得てきた多くの産物を得ることができない遊びを、今の子どもたちは繰り返しているような気がしてならない。それは、集団よりも個人で、屋外ではなくて室内で、動的なものよりも静的な遊びを好み、しかも保育士や玩具がないと遊べない子が出てきている現状が現れ出ていたことによる。

さらに特徴的な傾向は、汚れることを嫌う子どもや、ヒーローものの戦いごっこやアニメごっこが増えてきていること、ごっこ遊びの内容が変わってきていて、みんながペット役になりたがり、お母さん役のなり手がいず、いつの間にか”ねごっこ”になっているというような回答もあった。これは2008年版の『保育白書』の中でも触れられており、「おうちごっこ」が近年様変わりをし、かつての一番人気であった「お母さん役」から「お姉さん役」へ、そこから「赤ちゃん役」に移り、最近では「ペット役」が大人気であるという非常に気になる傾向が子どもの変化の一例として出されていた²⁾が、ここ山形でも同様のことが見られるのである。

運動機能や情緒面、社会性に問題が見られる中で、遊びのもつ意義はより一層重要さを増すものだと思うが、豊かな遊びが展開されていない現状には解決の糸口が見えない感じがする。

表8. 遊び

(回答数)

	総数	3歳児	4歳児	5歳児
集団遊びが苦手（一人遊びを好む）	20	2		4
汚れることを嫌がる	15	2		
外遊びを嫌がる（室内遊びを好む）	12	2	1	1
どんな遊びでも好きだ	9			
園での遊びには変化はないが、家庭での遊びに変化が見られる（テレビゲームをしている）	9			
動より静の遊びを好む	7	1	1	
外遊びを好む	7			1
すぐ疲れたと口にする	6		2	1
戦いごっこやアニメごっこが増えてきている	6			
遊びが創造性／発展性に乏しい	6			
保育者（大人）がいないと遊べない	5	1	2	
ルールのある遊びが苦手	5			
テレビやビデオを好む	5			
1つの遊びが長続きせず、次々と遊びが移行する	3			
お父さん役／お母さん役のいないおままと遊び	3			
指先を使った細かい遊びが苦手	2			
寒がったり、暑がったり、エアコンがないと生活できない	2			
興味のない遊びには加わらない	2	1		
散歩が嫌いな子が多い	2			
少人数で遊ぶ	2		1	1

○自由記述の中から特徴的なものを抜粋する

- ・友達からいろいろな刺激を受け、何でも挑戦する子が少なくなっている（5歳児）。
- ・親が汚されると嫌がるのが子どもに影響して外遊びを嫌がる子もいる。
- ・子ども同士の技術の伝達がうまく行われない。
- ・家庭の中で生活（食事、手伝い）にかかわりが少ない子は、キャラクターに興味集中していると感じる（食事の準備のときビデオで過ごしている）。
- ・がき大将までいかなくとも、遊びを引っばる、まとめるリーダー格の子がなく、いくつもの小グループができ遊ぶスタイルが多い。

- ・園では外で遊んだり、体を動かして遊ぶことが大好きなのだが、家に帰るとゲームをして過ごしている子が増えてきている。

4) 保育に感じる困難さとそれへの対応

これまでに挙げたような特徴を示す現代の子どもたちに対して、日々保育を展開する現場の保育士は、どのような点に困難さを感じているのか自由回答で尋ねた。

その結果、「手のかかる子への対応」が最も多く27回答、次いで「気になる子への対応」が12回答であった(表9)。ここで出された「手のかかる子」とは表10に示したような子である。このような子を含めてクラス全体をまとめて集中させ、保育を展開することに対して困難さを感じている保育士が多いようだ。

表9. 子どもについて感じる困難さ (回答数)

●子どもに関して感じること	総数
・手のかかる子への対応	27
・気になる子への対応	12
・障害児への対応	6
・自己主張が強い	4
・個人差が大きい	4
・落ち着きのない子が目立つ	3
・クラスがまとまらない	3
・登所時間の遅い子が増えている	3
・情緒が不安定な子への対応	2
・聞く力/理解力が不足している	2
・男の子が頼りない	1

表10. 手のかかる子

・保育のリズムを崩す子
・叱ってもほめても効果がない子
・遊べない／食べない／寝ないの3ないの子
・コミュニケーションがとれない子
・愛情不足の子
・年齢よりも幼い子が多い
・マイペースで毎日同じことの繰り返しの子
・かんしゃくを起こしやすい子
・勝手気ままな子
・自己主張が強い
・落ち着きがない
・情緒が不安定な子

しかし、保育士が最も困難さを強く感じているのは、むしろ子どもよりも保護者に対してである。

子どもよりも自分第一主義で親としての自覚がない、身勝手な保護者が多く、園への要望や権利意識がただただ強い保護者が増えているようだ（表11）。それが、子育てにも現れ出っていて、他の子どもや家庭との協調を考えない自己中心的な言動でわが子だけを可愛がる保護者が昔に比べ多くなっていることが指摘されていた。また、養育機能が低下してきていると思われる子育ての傾向も示されており、保護者対応の難しさが浮き彫りになった形だ。

表11. 保護者について感じる困難さ

(回答数)

●親の性格	総数
・身勝手な親が多くなっている／子どもよりも自分第一	32
・親としての自覚がない	18
・常識／道徳／マナー／社会性に欠ける	15
・権利意識が強い	5
・非協力的	4
・ストレートに感情を表現する	3
・素直	3

●子育ての傾向	総 数
・自己中心的／わが子第一	16
・子どもの言いなりで、躰のできない親が増えた	16
・園への要望／要求が多い	11
・子どもとの関わりが少ない	10
・子育てができない／無知な親が増えている	9
・偏った子育てをしている	7
・育児に悩みや不安を感じている	6
・子育てで情報（育児書）に翻弄されている	5
・子育てに関心・無関心の差がある	3
・生活リズムが乱れている	3
・知的なことを求める親が多くなった	3
・過保護／過干渉	2

●その他	総 数
・保育所と家庭（親）との考え方のズレを感じる	5
・子育てよりも仕事への関心が強い	3
・単親家庭が増えている	2

この状況下において、保育所は子育て支援の中核拠点としての役割を果たしていかなければならない使命をもつ。現状の困難さを痛感している現場では、保護者対応を強化するために日頃から保護者とのコミュニケーションを大事にし、信頼関係を築いたり、子育て相談の場を設けたり、問題が発生したときには迅速に個別対応できる体制をつくっているようだ（表12）。また、問題によっては積極的に関係機関との連携を図り、専門家のアドバイスによって効果的な対応を行っているところも多いようだ（表13）。

このように最近の保育士には保育実践のケアワークだけでなく相談援助も兼ねたソーシャルワークの役割も必要となってきたが、高齢者介護の場ではこの専門家がケアワーカーとソーシャルワーカーとに別れていることを考えると、両輪を担わなければならない保育士にとっては負担の多いことだと思う。

表12. 保護者に対するの対応方法 (回答数)

●保護者に対するの取組み	総 数
・保護者との連携を密にしている (連絡ノートの活用/送迎時の会話)	28
・丁寧な/受容的な/迅速な対応を心掛けている	17
・個人面談などによる個別対応	11
・研修会/講演会の企画	6

表13. 園としての対応方法 (回答数)

●園内における取組み	総 数
・職員会議等での情報共有/検討/連携	20
・専門機関との連携を密にしている	14
・職員研修会/講演会への参加	13

4. ま と め

これまでに挙げてきたような子どもの育ちの変化が起こる原因は、育つ環境に大きく作用するものと考えられる。特にそれは家庭環境が大きく、最近の家庭における子育ては子どもよりも親中心の思考が強い傾向にあり、子どもを親の生活に合わせる家庭が多いようだ。また、親の偏った育児観によってアンバランスな人間性をもった子ども達が増えている傾向にあり、そのために「手のかかる子」や「気になる子」が増えているのだと見受けられる。いろいろな面での個人差についても、入園時の個人差と入園後の育ちの個人差がともにあることは、親の子育て意識と自覚が以前よりも薄れてきていることが問題なのだろう。保育士にとってみれば、同じ年齢児の中でも、子どもへの関わりが大きく違うことが、保育の停滞に繋がるという懸念を抱く者は少なくないだろう。

子育ての基本は家庭にあり、保育所はその補完の役割を担うというのが前提である。今、家庭における養育機能が低下しつつある中で、子どもがより良く育まれるために、保育所の中でどのように保育をするかということだけではなく、家庭の中でどのように親から育まれるかを考えていかなければならない。そのために、保育所はなにができるのかを検討

していく段階にあるのではないか。

育つ環境の変化が子ども達の成長に大きく影響することは当然のことであり、その中で時代の特徴をよく捉えた保育というものを常に意識していかなければならず、保育士の専門性も日々変わっていくものと捉え、研鑽を積んでいくことが子ども達の望ましい成長と発達につながるのだと思う。

【引用文献】

- 1) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について（答申の概要）」中央教育審議会（平成17年1月28日）
- 2) 全国保育団体連絡会・保育研究所（2008）『保育白書2008年版』ひとなる書房、p.137

【参考文献】

- ・日本保育学会（1979）『保育学講座 9 日本の幼児の精神発達』フレーベル館
- ・井上健治・久保ゆかり（2001）『子どもの社会的発達』東京大学出版会
- ・河崎道夫（2008）「歴史的構成体としての子どもの遊びの変容」『保育学研究』第46巻 第1号、日本保育学会、12-21
- ・田尻由美子・無藤隆（2006）『子どもと環境』同文書院
- ・全国保育団体連絡会・保育研究所（2007）『保育白書2007年版』ひとなる書房

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、山形県内の保育所ならびに幼稚園の先生方にはアンケート調査のご協力を頂いた。多くの質問項目が記述式であったにもかかわらず、大変貴重なご意見を詳細に寄せて頂いたことに、深く感謝申し上げる。

（付記）

本研究は、日本保育学会第61回大会（2008年5月）において発表した内容に加筆したものである。

(資料1)

一 子どもと保護者、保育現場に関するアンケート(3、4、5歳児版) 一

私たちは、子どもと保育者、保護者との関係、保育現場の現状、子どもの成長を促進しているのではないかと感じており、そこで、現在の子どもと保護者の養育観念や保育現場の現状把握、これからの保育者や保護者の働きかたの調査を行いました。

調査期間は、2014年10月～12月の保育者、アンケート回答者の協力と参加を仰ぎました。大変多くのご回答をいただき、回数は15月とも目(未)までのお届け中となっております。

山形短期大学子ども学科 講師 吉田 友子
主任 村上 洋子

1 アンケート回答者(あなた)についてお尋ねします。

- ① あなたの年齢と性別を教えてください。()歳 (男/女)
- ② あなたの現在の職种を教えてください。(保育士/保育所/医師/)
- ③ あなたの所属機関を教えてください。()

④ 何年くらい前から子どもの様子が変化しているとおっしゃいますか?以下を選択して○をつけてください。
 ()1年以内 ()1～3年前 ()3～5年前 ()5年以上 ()気づいていない

⑤ 保育をしていく子どもの様子が気になることや、昔の子どもと現在の子どもの様子の違い(良い面、悪い点とも)にありましたか?項目に分けて、ご記入ください。

<基本的な生活習慣の獲得> (記入例)おしつをしっかりとらえる幼児が多くなってきている。(5歳児)

<身体的發展> (記入例)おしゃべりが増えてきた。(5歳児)

<運動活動の発達> (記入例)記憶力を重視し、競争の力が付いてきた。(5歳児)

先方もご記入が終了いたしました。

「曾根」

<知的発達> 園児の間で長し短しではあるが、いろいろある。(4歳児)

<情緒面> 園児の間で長し短しではあるが、いろいろある。(4歳児)

<社会化> 園児の間で長し短しではあるが、いろいろある。(4歳児)

<遊び> 園児の間で長し短しではあるが、いろいろある。(4歳児)

4 現在、保育に困難さを感じることはありますか？それは何ですか？

5 困難さを感じていることに対して、園、もしくは個人で、何か対応をしていますか？

6 最近の保護者について、どのように感じているでしょうか？

ごまのありがとうございます。

